

トンマッコルへようこそ

2006(平成18)年5月26日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・脚本＝パク・クァンヒョン／音楽＝久石譲／出演＝チョン・ジェヨン／イム・ハリョン／リュ・ドクァン／シン・ハギョン／ソ・ジェギョン／カン・ヘジョン／スティーブ・テシュラー（日活配給／2005年韓国映画／132分）

……トンマッコル村とは自給自足の山奥の村で、村民たちは争うことすら知らない、いわばユートピア。朝鮮戦争の真っ只中、そんな村を訪れたのは、米軍パイロット、韓国軍兵士、人民軍兵士という「3組」の「お客さん」……。こりゃ大騒動が起こること必至だが……？ 2005年韓国で大ヒットしたこの映画は、日本人でも誰が観てもよく理解でき、感動できること請け合い！



構想力のすばらしさに感動！ トンマッコル村とは？

この映画は、韓国にとっては最も悲しい同一民族が南北に分かれて戦った朝鮮戦争を描くものだが、深刻な目ではなく、何とも言えないユーモアたっぷりの目で描きつつ、最後は壮大な感動を観客に与えるというすばらしい構成になっている。

トンマッコルは、もちろん架空の村。1950年11月という朝鮮戦争の真っ只中、いくら人里離れた田舎村であっても、戦争の情報が何も入って来ないなどという村が現実にあるはずはない。このトンマッコル村はあくまでパク・クァンヒョン監督が考え出した村で、いわば空想的社会主義者であったフーリエ、サン・シモン、ロバート・オーエンらがマルクス、エンゲルスの登場以前に夢想したのと同じような、ユートピア……。

こんな何ともすごい構想を完成させたパク・クァンヒョン監督は、第4回大韓民国映画大賞で監督賞と新人監督賞をW受賞した上、脚本賞まで受賞という快挙を！

トンマッコル村への「3組」の「お客さん」とは……？

そんな村に次々と集まってきた(?)「お客さん」は、第1にアメリカ空軍のスミス大尉(ステイブ・テシュラー)。もっともこれは、彼の乗っていた飛行機が墜落したためやむをえず……。第2に韓国軍のピョ・ヒョン Chol 将校(シン・ハギョン)とムン・サンサン衛生兵(ソ・ジェギョン)の2人。この2人も本来は何の縁もゆかりもない関係……。そして第3に、人民軍(北朝鮮軍)のリ・スファ将校(チョン・ジェヨン)、チャン・ヨンヒ下士官(イム・ハリョン)、ソ・テッキ少年兵(リュ・ドクァン)の3人。これは包囲網からの逃走中、次々と仲間を失い、やっと生きのびてきた3人。

こんな「3組」の「お客さん」が一堂に会するという事態になれば、それまで静かだったトンマッコル村はたちまち修羅場となることは必至のはずだが……？

狂言回し役は……？

映画の冒頭、ちょっとヘンな顔つきをした女性が登場する。一体これは何のことか、その時点ではよくわからないが、彼女は結果的にトンマッコル村へ人民軍兵士3人を案内することになり、物語全体の狂言回しの役割を担う村の娘ヨイル(カン・ヘジョン)。このヨイルに扮するのが、パク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』(03年)で、300人のオーディションの中から選ばれたカン・ヘジョンだが、彼女は「最近はやりの韓流ドラマに登場するような美人女性ではなく(失礼?)、かなり個性的な顔立ちの女優」(『シネマルーム6』54頁参照)。

『オールド・ボーイ』でもかなり変わった役をうまく演じていたが、この『トンマッコルへようこそ』でも、心は善良だが、頭が少し弱い女という難しい役柄に挑戦。自給自足をして、何の争いもなく、村民みんなが仲良く暮らしているトンマッコルの村民たちは、メガネをかけた知識人1名を除く全員がノー天気な性格だが、そのノー天気の象徴的存在がこのヨイル。彼女の無邪気な天使のような心は、まさに村民の柔和な心を代表するもの……。

そんな風変わりな役柄の熱演により、見事にカン・ヘジョンは第26回青龍賞女優助演賞と第4回大韓民国映画大賞で助演女優賞を受賞。おめでとう！

緊張と笑いのバランスが絶妙……

トンマッコル村へ先着していた（？）韓国軍のヒョン Chol とサンサンの2人は、スミスから「救出に来てくれたのか」と歓迎され、少しは村民に溶けこんでいた。そんなヒョン Chol とサンサンが突然目にしたのは、銃をかついだにつき北朝鮮のアカの兵士。すなわちスファ、ヨンヒ、テッキの3人だ。村民が混乱する中、銃とピストルを互いに向け合っ、にらみ合う韓国軍兵士2人と人民軍兵士3人……。

一触即発とはまさにこのことで、相手方が少しでも不穏な動きを見れば、引き金にあてた指が直ちに動き、弾丸が発射されることは必至。しかし双方とも互いにそのタイミングがつかめず、にらみ合ったままドンドンと時間だけが過ぎてゆく。そんな中、人民軍兵士の3人はピストルと銃から手榴弾に持ち替えたが、それはなぜ……？

こんな緊張感いっぱいのシーンだが、他方で笑いを誘うのは、盾のように真ん中に集められていた村民たちの動き。まず子供がおしっこに行きたいと言って1人抜け出ると、大人たちも用事があるからと言って、1人抜け、2人抜け……。最初は「動くな！」と怒鳴っていた兵隊さんたちだったが、そもそも村民たちは銃やピストルの恐さ自体を全然知らないのだから、銃による脅しが効かず全く処置なし……。こんな緊張と笑いのバランスの絶妙さに、ただビックリ……。

にらみ合いはいつまで……？

いつの間にか村民たちは誰もいなくなり、一夜明けてもまだにらみ合ったままなのは、韓国軍兵士2人 VS 人民軍兵士3人だけ……。ひょっとして、これが2日2晩、3日3晩続くのかなと思っていると、突然ハプニングが……。それは、じっとにらみ合っていることに疲れ、ついウトウトとしていた人民軍のテッキの手榴弾の信管をヨイルが面白がって抜いたこと。こりゃ大ゴトだと一瞬思ったら、なんとその手榴弾は不発弾……？

一瞬の緊張が去り、ヒョン Chol の手に渡ったこの不発弾をポイと後ろに投げ捨てると、実はこれが不発弾ではなく、少し性能が悪かっただけ……。食料品の

貯蔵小屋に投げ捨てられたこの手榴弾が大爆発したから大変なことに……。さて、その後始末は……？

冷戦構造から融和状態へ……？

このように、この映画の第1部は、笑いの中にもカッチリと張りつめた南北両軍兵士たちの緊張感を描くもの。そして、それに続く第2部は、彼らが村民たちの中に入って生活していくうち、その緊張感が少しずつほぐれていく姿を描くもの。

軍人たちにとって軍服は階級を「公示」するために不可欠なものだが、南北軍兵士たちは数回のイザコザをくり返していく中、次第にその緊張感は薄れていったから、軍服も不要となり、今では兵士たちもみんな村民と同じ服装に。

もっともそうなるについては、1つのエポックメイキングな出来事が……。それは、村を襲った巨大なイノシシを兵士たちが力を合わせて退治したこと。その奮闘の様子とそれを契機として兵士たちが心を通わせていく様子はすごく面白いから、是非映画館で……。

そして今や、村民たちと一緒に力強く働く中、ある兵士にはちょっとした恋の芽生えのような雰囲気さえも……。

しかし、いくら山の中の孤立した田舎村といっても、やはり時代は戦争の真っ只中。南北の兵士5人を探しにくる可能性は少ないとしても、米軍パイロットのスミスについては、死亡が確認されない限り、米軍は探索を続けているのでは……？

平和はいつまでも続かないもの……？

案の定、米軍（連合軍）は必死にスミスの探索を続けていたが、スミスとの通信は断たれたまま。そうなればスミスの飛行機は敵軍に撃ち落とされたと判断しなければならず、そうであれば報復攻撃が不可欠。死亡が確認されない以上、スミスはまだ生きている可能性があるから、報復爆撃は村民を巻きこむ上、生きているスミスを危険にさらすことになるという慎重論・反対論もあったが、遂にその決断が……。

わが日本国は、1945年8月15日の終戦以来今日まで、平和憲法の下に60年間以上の平和を享受しているが、その平和は決して無条件に誰かから与えられたもの

ではないということをハッキリ認識しなければならないと私は常々思っている。したがって私は、「非武装中立」というノー天気な発想は嫌いだし、「平和憲法を守れ！」というスローガンだけの平和運動も嫌い……。

今度は大騒動に……

それはともかく、今や完全に村民と融和して平和な生活を送っている米軍パイロット、韓国軍兵士、人民軍兵士たちにとっては、とにかく放っておいてくれたらいいというのが正直な気持だが、そうはいかないのが厳しい現実。村民たちが楽しみ浮かれている中、綿密に立案された作戦どおりパラシュートでトンマッコル村へ降り立った米軍兵士たちは、完全武装の姿で今、村民たちの目の前に……。

彼らの目的はただ1つ、スミスを救出すること。しかし、それを村民たちに伝える前に、いくら村民と同じ服装をしていても、やはり眼光鋭い目をした軍人にはおいでわかるもの……？ 「第1部」では緊張感の中、撃ち合いは何とか回避されたが、さて今回は……？

米軍兵士は気も短いし、気性も荒いうえ、任務の実行は24時間以内と限定されているから、ある偶然が次の偶然を呼び、遂には……？ したがって、スミスが登場した時には、既に大波瀾が終わった後だった……。

南北兵士とスミスたちの作戦は？

こんな大騒動の中で南北兵士とスミスたちが得た情報は、スミスが救出されない場合は、24時間以内にここトンマッコル村への爆撃が開始されるということ。そんな状況の中、スミスが南北兵士たちに見せたのは、スミスが隠していた秘密の兵器の数々。

そこでスファとヒョン Chol たちが考えた作戦は、トンマッコル村から移動し、その場所からこの兵器を使って爆撃機を攻撃すれば、爆撃機はその場所を爆撃してくるから、結果的にトンマッコル村を救うことができるというもの。しかし、そんな「おとり作戦」には危険がいっぱい。というより、爆撃にさらされ、死んでしまう確率が限りなく高いはず……。

全員一致の行動は……？

そう理解したサンサンだけは、「なぜ自分の命を懸けてトンマッコル村を救わなければならないのか？俺は国へ帰る！」とダダをこねた(?)ものの、やはり世話になった村民たちを忘れられないうえ、他の兵士たちの毅然とした姿を見ると、自分だけが尻尾を巻いて逃げていくわけにはいかないもの。したがって、「なぜいつもこうなるんだ……」とぼやきつつ、トンマッコル村とその村民を守るため、決死の「おとり作戦」に向かうことに……。

折りしもこの作戦を指揮するのは、スファの提案によってヒョンチョルの手に。そんな作戦は、さて、ヒョンチョルの指揮によって本当に実現できるのだろうか……？

作戦は大成功！ ということは……？

この作戦は大成功！まずは戦闘機と「対決」した5人の兵士たちは、それを1機、2機と撃ち落とすことに大成功。ということは、その次には望みどおり、爆撃機の登場となり、空からは雨あられのように爆弾が……。さて、5人の兵士たちはうまくその場を脱出することができるのだろうか……？

この映画のラストは、戦闘機との「対決」で生き残ったスファ、ヒョンチョル、テッキの3人が雪の上に座しているところに、爆撃機からの爆弾が次々と降り注ぎ、次々と真っ赤な炎をあげていくという美しくも悲しいシーン。3人は互いに顔を見合せながら、自分たちが人間としてやるべきことを立派にやり遂げたことをそれぞれ誇りに思うとともに、互いにそれを讃えあうようにニッコリと微笑みながら、その炎の中に包まれていったが……。

思わず思い出した、あの名作のラストシーン！

こんなシーンを観ながら思わず思い出したのは、あの名作『誰が為に鐘は鳴る』(43年)のラストシーン。すなわち、足を撃たれたためこれ以上仲間たちと一緒に逃走することができないと悟ったゲイリー・クーパー扮するロバートは、敵をここで食い止めるから、みんなはマリア(イングリッド・バーグマン)を連れて逃げてくれと言い残し、1人敵に対して銃を撃ち続けるというシーン。傷の

ために意識を失いそうになるのを必死に我慢しながら、ロバートは敵への銃撃を続けるが、それは一体何のため？ 革命のため、それとも国のため……？ もちろんそれはあるだろうが、ロバートがこれほど強い自己献身を進んですることができたのは、愛するマリアのため……。

「南北連合軍」の5人が、爆撃機の爆撃を誘い込むという命がけのおとり作戦を自ら進んで決行したのは一体何のため……？ それは決して、金日成将軍のためでもなければ、アカを駆逐するためでもなかった。それは、あのトンマッコル村を守り、あのやさしい村民たちの命を守るため……。

韓流ブームの昨今は……？

一時日本を席捲していた韓流ブームも、最近は少し落ち着いてきた（冷めてきた……？）ようで、『キネマ旬報』5月下旬号（160頁）によれば、『タイフーン』（05年）も『連理の枝』（06年）も興行収入は7、8億円にとどまりそうとのこと。そして『キネマ旬報』6月上旬号では、「GW 興行で、韓国映画が、のき並み厳しい成績を余儀なくされた。最終興行見通しでは、『連理の枝』6～7億円、『タイフーン』3～4億円、『デュエリスト』2～3億円」とのこと（145頁）。韓国映画の日本での買いつけ価格の高騰もかなり激しいようで、これでは韓流ブームの存続も危ぶまれる。すると、今年の秋、日本で公開される『トンマッコルへようこそ』はどうだろうか……？

パンフレットによれば、この映画は2005年の韓国映画界 No.1の大ヒットとなり、800万人が観たとのこと。私も早くからそんな情報を耳にしていたうえ、宣伝会社の人からも、「これはすばらしい映画です」と聞かされていたので楽しみにしていたが、予想どおり、いや予想以上の出来に感激し、韓国での空前の大ヒットも当然と納得したもの。『タイフーン』も南北分断をテーマとした面白い映画だったが、設定に多少の無理があるうえ、地理的な広がりを含めて話が少し難しすぎ……？

日本での大ヒットに期待！

それに比べればこの『トンマッコルへようこそ』は、1950年の朝鮮戦争のこと

をよく知らない若い人たちでも十分理解できる程度の歴史的背景となっている。また、そのストーリーも、第1部は米軍、韓国軍、人民軍三者の対立の姿、第2部は村民と三者の融合の姿、そして第3部は「南北連合軍」5人によるトンマッコル村を守る自己犠牲の姿、とうまく3部構成されているから、ものすごくわかりやすい。

黒澤明監督の『七人の侍』(54年)も、世話になった村を守るため、七人の侍が自己献身的に盗賊たちと戦うストーリーだったが、そんなイメージともダブらせながら、日本人が楽しむことができる要素がいっぱい。私としては、こんな韓国映画が日本でも大ヒットすることを大いに期待したいものだ。

2006(平成18)年5月27日記

「グエムル」の次は「トンマッコル」だ！

今年の韓国ではポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』が1240万人を動員する大ヒット。そんな中、昨年800万人の韓国人が笑って泣いた『トンマッコルへようこそ』が10月28日、日本で公開される。

今年7月に起きた北朝鮮によるミサイル発射とそれに続く核実験の危機、さらに求心力を欠いてきた韓国の盧武鉉大統領による反米・親北路線の推進は軍事的・政治的に大きな不安要素。他方9月26日に発足した安倍新政権の対韓国・北朝鮮外交にも不安がいっぱい。しかし、そんな不安はこの映画を見れば一気に解消！

時は1950年代。朝鮮戦争の真った中だ。米軍戦闘機がトンマッコル村へ墜落し、村人は連合軍兵士を救助したが、偶然そこで人民軍と韓国軍の兵士が遭遇したから一大事。

しかし、ト村はかつて空

想的社会主義者が夢想したような、戦争も武器もそして争うことすら知らないユートピア。韓国には『アラザーフード』『SILMIDO(シルミド)』など朝鮮戦争の悲劇を描いた名作



が多いが、同じテーマでもパク・クァンヒョン監督のアプローチは実にユニークで、構想力のすばらしさは抜群！

前半は、「アカ野郎」Vs「傀儡兵」と罵り合いにらみ合う南北兵士の姿が描かれるが、後半は一変。軍服を脱ぎ村民とともに農作業に従事する中、次第に生まれてくる互いの信頼感と友

情は一体ナニ……？ そんな「冷戦から融和へ」と自然に移行する人間本来の姿にあなたは思わずほほえむだろう。

もっとも現実はずっと冷酷でそんな一時の平穏状態は一変。連合軍兵士の救出を巡る手違いによりト村は連合軍から爆撃を受ける運命に。そこで兵士たちが共同でとったのは村人を救うための「おとり作戦」だが、それは自己犠牲を伴うもの。『誰が為に鐘は鳴る』のラストシーンをほうふつさせる尊い自己犠牲の姿は感動的で、涙があふれてくるはず。

狂言回し役となるノータク村娘の熟演を含め、緊迫感と笑いを共存させた韓国軍と人民軍兵士たちの演技はすばらしく、今年の韓国映画のイチオシ。ところで、日本の、そしてあなたのトンマッコルはどこに……？

(弁護士 坂和章平)

産経新聞2006(平成18)年10月6日